WAM助成

孤立を予防し、孤独な気持ちに安心感と勇気をそだてる

令和４年度補正予算　社会福祉振興助成事業
特定非営利活動法人まど
実践レポート

社会的つながりの再構築をめざして

こまど館

緊急滞在レンタルプレハブ

体験格差解消

屋内外の体験とあそび

全6回　のべ参加人数58人

こども食堂

会食スタイルと配食スタイル

会食：9回　配食：6回　のべ利用人数270人

学びと居場所

だれかとつながる勇気と安心感

「学び」82日開所・のべ493人
「居場所」75日開所・のべ287人

①体験格差解消

②こども・若者に必要な
でかけたくなる楽しい地域の情報

③意図的・計画的な体験活動

自然、農業や食を通して地域の魅力を伝えていくこと。
ここで学んだ体験は地域に誇りをもち、人とつながり、
もう一度でかけたい気持ちにつながる。

季節のフルーツ狩り

アロマ調香体験

登録有形文化財久恒邸にて

3月18日 参加者13名

デジタルアート鑑賞

癒しのチームラボ真玉海岸

11月14日 参加者16名

豊後高田そばうち道場

一度はチャレンジしてみたい

11月14日 参加者16名

耶馬渓サイクリング

自転車の移動は自立への一歩。

10月14、23日 参加者合計18名

言いたくないことを言わなくても居られる場所

孤立と自立の狭間で

・社会からの承認欲求をもちながらも
　社会的つながりが弱いこども・若者たち。

- **タイミングは今じゃないかも、、、**
- 地域の幹線道路沿いに常設の施設をおくことで立ち寄りやすい場としています。
- この場所に、困っていてもこまっていなくても立ち寄ることができる場。
- 支援につながる窓口として、タイミングは今じゃないかもしれないけど、いつか役に立つことができる場。

“食”の支援は
つながるあしがかり

“食堂”＆“茶菓サービス”

- ようやくコロナが収束方向となり対面での食の交流が再開しました！
- 「コロナだから集まれない」ではなく、お弁当配食といった手段をかえてでも“食”支援というコミュニケーションは続いていることを伝えたいと活動を続けてきたので、ひさしぶりの会食形式のこども食堂には熱い思いがわくわく。
- 近所のパン屋さんのフードロス対策と協働し、焼き立てパンの無料提供も。
- ハロウィンイベントや餅つきも“食”が要。
- 歯みがきや口腔ケアの学びもプラス。

“孤食”＋“黙食”＋“対人不安”

- コロナ対策ではじめたこども宅食。

宅食には申し込みがあっていたご家庭がこども食堂には参加希望がない。

「人前で食べれない。。。」

↓

<u>会食形式と宅食の混合</u>で対応

- 家庭が孤立しないように、生活状況の把握に努め、行政や関係機関とも連携した見守りの体制をつくっています。

5年間の助成事業の
とりくみ

活動の参加者・家族、たくさんの協力者、
セミナー講師、NPOリソースセンターの方々、
スタッフのみんなとともにつくった活動実績の数々

・学習支援

・居場所づくり

・こども食堂

・体験（ヨット、動物、農業収穫、車両、自然ダム、着物着付け、祇園散策、　ジオパーク、フェリー乗船、JR乗車、サイクリング、温泉、防災食、調香、博物館、水族館、テーブルマナー、神社参拝、ウィンタースポーツ、BBQ,染物、デジタルアート鑑賞、そばうち体験など）

・支援者が学ぶセミナー（求人票、ビジネスマナー、電話応対、犯罪・非行、思春期青年期の理解者になるために、性教育など）

・ミニ職業体験ワーク

・相談・緊急滞在施設

第3回子供の未来応援基金

2019.4～2020.3

制度の狭間で困難を有する者への学習支援と居場所づくり

第4回子供の未来応援基金

2020.4～2021.3

制度の狭間で困難を有する者への学びと居場所とネットワーク

第5回子供の未来応援基金

2021.4～2022.3

持続可能な子どもたちの生涯学習と地域格差解消活動に挑戦する

令和4年度予備費社会福祉振興助成

2022.4～2023.3

子ども・若者と地域社会の生涯学習“MADO　to　MADO”

令和4年度補正予算社会福祉振興助成

2023.4～2024.3

孤立を予防し、孤独な気持ちに安心感と勇気をそだてる

- まとめと今後の課題

なぜ、こども・若者は社会的つながりが弱い状況へと追い込まれるのかを考えると、思春期の青少年はだれもが脳の成熟の差異による混乱と個人の事情に向き合わなければならいが、彼らにはそれに加えて、**「貧困や家庭崩壊などの家庭環境」「なにも助けてくれない地域環境」**がある。

不登校やひきこもりにより地域で孤立しており「小さい頃は明るい元気な子だった」「ムードメーカーで部活のリーダーだったのにどうして？」という以前の姿とは理解されがたい事例はたくさんある。そこに至るには、**いっぱいいっぱいになってしまった→これ以上はむりだからスイッチを切る→自分も守りたい傷つきたくない→他人も傷つけたくない→小さな反抗→希死念慮**、という流れが見えることが多い。

この5年間は法人の自主事業に加えて助成事業にとりくんだことによって、確信がもてはじめたことを報告したい。

ひとつは、体験活動を計画的・意図的に行うことによる可能性の拡大と支援者の質の重要さである。助成事業の支援者とボランティアからは「わたしたちは（体験活動の）参加者だった。」と感想があった。これは共生社会をかんがえるうえでとても大切な点である。
しかし、いっしょに楽しめる体験活動を実現できたのは、配慮しすぎるくらいの配慮をし、リスクも想定し、時間帯や参加メンバーの顔ぶれをコーディネートし、さらに反省点をいかしつつ次回の計画をたてるといった、きめ細かい心配りと目配りが必要であった。それにより、共通の話題によって仲間ができ、次回も誘い合って助成事業に申し込みをする支援対象者の変化をみることができた。“その場限りのお集まりの場”のようにみえて、実は決してそうではない準備をする企画力をもった支援者育成が欠かせない。

もう一つは、支援対象者とその家族に現実と向き合わせることの大切さと困難さである。「やればできる」「その時になったら考えます」といった理想を先延ばしにする傾向が、学校や社会資源を利用する力をはぐくまないことにつながり、地域から孤立してしまう原因になっている点である。

大きな変化は期待できなくとも、当事者とその家族が現実に向き合う力をもち続けられるように支援者は意識せねばならない。見守りと言うのは決して放置や先延ばしであってはならない。そのため、今後の課題としては、支援者のメンタル支援、支援体制の整備がある。
さらに、当法人の活動地域内では、全国ニュースで報道される事件もあったが、情報がほとんど公開されていない。支援のための情報と関係記録等の限定的な開示をし個人情報に配慮しながら共有できる仕組みを構築する必要がある。

当法人の活動地域では、このように課題はたくさん残ったままなので、今度も実践をつづけ、努力、努力、努力をしたい。

KOMADO STREET

NPO法人 まど

NONPROFIT ORGANIZATION MADO

- 放課後等デイサービス
- 自立訓練
- おもちゃ図書館こまど
- 不登校・引きこもり相談支援センター
- フリースペースこまどぷらす
- 自閉症ｅサービス@おおいた